

万葉の植物たち

[西村 清巳](#)

子どもたちの感性を養うために、子どもたちを自然の中に導き出すのは大人の役目であります。自然を見る目を養い、自然の不思議、自然の素晴らしさに気づく子どもに育てるのは大人の義務であります。

アメリカのレーチェル・カーソンが力説する『自然界の不思議やすばらしさに目を見張る感性こそが知性を育む肥沃な土壌になる』という教育観を実践に移す必要性が今ほど感じられることはありません。

子どもたちを素晴らしい自然に導く必要性を、大人の方々に感じていただくために、主として春の庄原の山野を彩る25種類の万葉植物（サクラ、ウメ、シキミ、アセビ、ツツジ、ツバキ、ミツマタ、モモ、カタクリ、ウツギ、スミレ、アカメガシワ、フジ、ヨメナ、クリ、ツユクサ、クズ、ワラビ、コナギ、キキョウ、ヤマボウシ、ヌルデ、ヘクソカズラ、ヤマハゼ、ネムノキ）を紹介しました。万葉集を通して感じる万葉人の自然観と受講生の皆さんの意見を対比しながら自然を見る目を深めていくことに努めました。



2011年4月26日、TSS文化大学で講演する著者

今回紹介した25種の植物のうち、代表的なサクラ、ウメ、ウツギと7種類の万葉植物に万葉歌を添えて紹介します。

1. サクラ（万葉名さくら）

今をときめくソメイヨシノは、万葉時代には存在しなかったので万葉人が見た桜は、ヤマザクラかオオシマザクラかエドヒガンザクラであろうと思われます。万葉集にはさくらが46首詠まれています。花の美しさや散り行く美しさが歌われています。在原業平や西行法師のように桜に入れ込む姿は万葉時代には見られません。



見渡せば春日の野辺に霞たち 咲きにほへるは 桜花かも

10-1872 作者不詳

2. ウメ（万葉名うめ）

万葉時代はうめを庭に植えている人が多く、庭の梅をめぐる歌がたくさんあります。大宰府の長官大伴旅人邸で梅見の宴をして詠んだ歌が38首あります。万葉時代のうめは「雪とともに咲く」という捉え方がされています。また、鶯が鳴きにやってくるような表現が多く「うめにうぐいす」のセットを作ったのも万葉時代ではないかと思われます。うめは万葉集中122首詠まれており大変な人気植物です。



わが園に梅の花散るひさかたの 天とり雪の 流れ来るかも

5-822 大伴旅人

3. ウツギ (万葉名うのはな)

「卯の花のにおう垣根にほととぎす早も来啼きて・・・」と歌った教育唱歌のもととは万葉時代にあったのかと思わせるほど「卯の花とホトトギス」はセットで歌われています。卯の花が万葉集で24首詠われている中、19首が卯の花とホトトギスがセットで出てきます。実際今でもウツギの花がしだれる頃ホトトギスの鳴き声が聞かれますが、ウツギにとまっている場面にお目にかかったことはありません。



卵の花のともにし鳴けば霍公鳥 いやめづらしも 名告り鳴くなへ

18-4091 大伴家持

4. シキミ (万葉名しきみ)



奥山の櫛が花の名のごとや しくしく君に 恋ひ渡りなむ

20-4476 大原真人今

5. アセビ (万葉名あしび)



磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど 見すべき君が ありと言はなくに

2-166 大来皇女

6. ミツマタ (万葉名さきくさ)



春さればまづ三枝の 幸くあらば 後にも会はむな恋ひそ我妹

10-1895 柿本人麻呂

7. カタクリ (万葉名かたかご)



もののふの八十をとめらが 汲みまがふ 寺井のうへの堅香子の花

19-4143 大伴家持

8. ヤマボウシ (万葉名つみ)



このタベ柘のさ枝の流れ来ば 梁は打たずて取らずかもあらむ

3-386 作者不詳

9. ヨメナ (万葉名うはぎ)



春日野に煙立つ見ゆ をとめらし 春野のうはぎ摘みて煮らしも

10-1879 作者不詳

10. コナギ (万葉名なぎ)



醬酢に蒜搗き合てて 鯛願ふ 我にな見えそ水葱の羹

16-3829 長忌寸意吉麻呂

今私たちは、自然の花を見て歌を詠む技も感性もありますが、せめて自然を肌で感じる事が出来る生活を目指したいものです。そして子どもたちには大人たちが身につけることを忘れた「豊かな感性」を身につけてほしいものです。

(本稿は、2011年4月26日にTSS文化大学で行った講演の概要である。)